

四国におけるゲンゴロウ科 2 種の初記録

渡部晃平¹⁾・北野 忠²⁾・上手雄貴³⁾

¹⁾ 〒 920-2113 石川県白山市八幡町戌 3 番地 石川県ふれあい昆虫館 (koutarouhigasi@yahoo.co.jp)

²⁾ 〒 259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1 東海大学教養学部 (gengoroh@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp)

³⁾ 〒 467-8615 愛知県名古屋市長瑞穂区萩山町 1-11 名古屋市衛生研究所 (optioservus@yahoo.co.jp)

New Distributional Records of Dytiscid Beetle (Coleoptera, Dytiscidae) from Shikoku, Japan

Kohei WATANABE, Tadashi KITANO and Yuuki KAMITE

Abstract. *Hydroglyphus flammulatus* (Sharp, 1882) and *Copelatus takakurai* Satô, 1985 are recorded for the first time from Shikoku, Japan. With this record, 45 species of Dytiscidae (Coleoptera) are recorded from Shikoku.

四国からは、これまでに 43 種のゲンゴロウ科が記録されている (森・北山, 2002; 中島ほか, 2005; 出嶋, 2007; 渡部・久松, 2016). 筆者らは、愛媛県で四国初記録となるゲンゴロウ科 2 種を採集しているため、ここに報告する。採集地は日当たりの良い池であり (Fig. 5), 両種ともに植物の密生した水際の浅瀬より採集した。

1. アンピンチビゲンゴロウ *Hydroglyphus flammulatus* (Sharp, 1882)

1♂, 愛媛県北宇和郡鬼北町延川, 4. IX. 2017, 渡部採集・保管 (Figs. 1–2)。

本種は環境省版レッドデータブックにより情報不足に選定されている (環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室, 2015)。これまでのところ、隠岐諸島 (中ノ島), 九州 (福岡県, 長崎県), 八重山諸島 (石垣島, 西表島, 与那国島) から記録されており, 八重山諸島からは複数個体が確認されているが, 九州以北の各地の記録は全て 1 頭ずつの確認にとどまっている (上手ほか, 2003; 井上ほか, 2013; 深川, 2014; 林ほか, 2015)。今回の調査においても約 2 時間で 1 頭しか確認できなかったこと, 当地では筆者の一人渡部がこれまで何度も調査を行ってきた場所であるにも関わらず初めて確認されたことなどから, 同地に定着している可能性は低く, 移動性の高い種と推測される。

Takizawa (1933) によりアンピンチビゲンゴロウという和名が与えられていた *Bidessus antennatus* Régimbart, 1892 は, *Guignotus flammulatus* Sharp, 1854 のシノニム (Guignot, 1959) とされ, さらに *Guignotus* 属は *Hydroglyphus* 属のシノニムとされた (Biström & Silverberg, 1981)。

日本においては, 上手ほか (2003) が本種を初めて記録した際に, 触角第 10 節に見られる特徴を性的二型ではなく誤って種の特徴として報告していた。

しかし Regimbart (1899) は *B. antennatus* の触角第 10 節について, 雄は単純であるのに対して, 雌は前方から後方にかけて湾曲すると記述しており, Hájek & Wewalka (2009) も, *Hydroglyphus flammulatus* (Sharp, 1882) の雌の触角第 10 節の形状と雄の交尾器が類似種と区別する際に有用な特徴であることを挙げている。したがって, 今回得られた雄個体の触角第 10 節は単純であったが, 体長, 特徴的な上翅の斑紋および雄交尾器の形状から本種と同定した (Vazirani, 1968; 上手ほか, 2003; Hájek and Wewalka, 2009)。

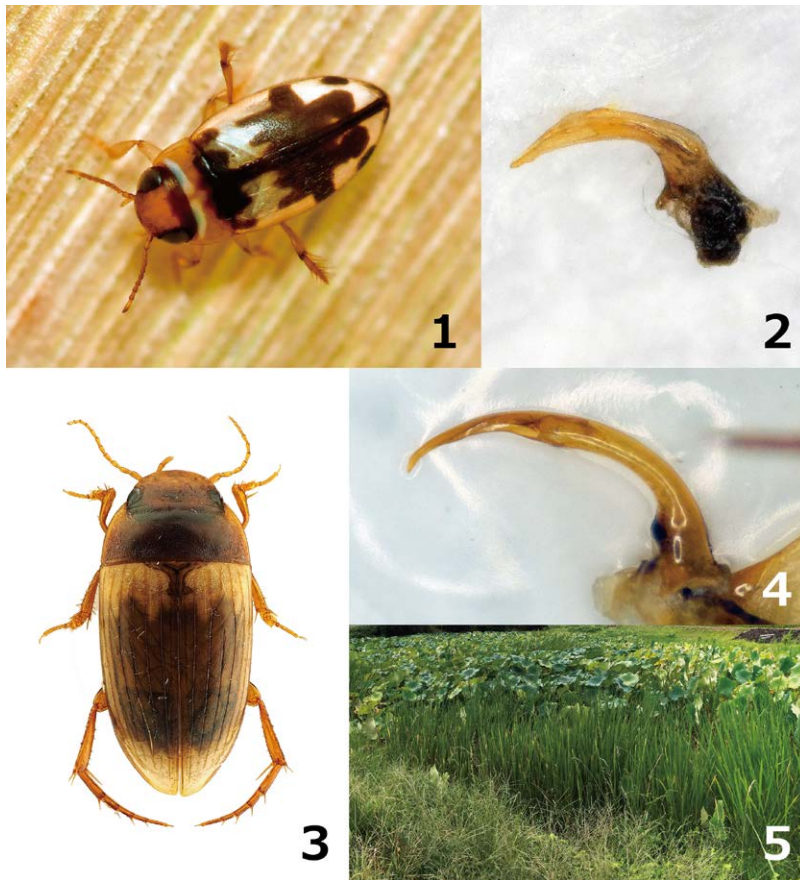
なお, 上手ほか (2003) で, 与那国島与那国町南牧場で得られた標本を 5♂3♀ と報告していたが, 再検討した結果 3♂3♀ の間違いであった。また, 図 3 に示された触角は雄ではなく雌であることが判明した。

2. ヒコサンセスジゲンゴロウ *Copelatus takakurai* Satô, 1985

3♂1♀, 愛媛県北宇和郡鬼北町延川, 4. IX. 2017, 渡部採集・保管 (Figs. 3–4); 1♂, 同所, 4. IX. 2017, 北野採集・保管。

本種はこれまで本州 (神奈川県, 静岡県), 九州 (福岡県, 佐賀県, 長崎県, 熊本県, 大分県, 宮崎県), 屋久島から記録されていたが (木村, 1993; 坂本・秋山, 2001; 2003; 多比良・北野, 2001; 森・北山, 2002; 中島, 2005; 林・藤原, 2007; 深川, 2015; 佐野, 2015), 四国 (愛媛県) にも分布することが確認された。

本種の生態については不明な点が多いが, 他県における発見事例では林縁や林に囲まれた小規模でごく浅い水域から確認されており (木村, 1993; 多比良・北野, 2001; 中島, 2005; 佐野, 2015 など), 今回のように周囲が樹林に囲まれていない開放的で日当たりの良い水域 (Fig. 5) で複数個体が得られたことは, 本種の生態を解明する上で興味



Figs. 1–5. *Hydroglyphus flammulatus* (1–2) and *Copelatus takakurai* (3–4) collected from Shikoku and its habitat (5). 1, 3, Habitus; 2, 4, penis in lateral views.

深い事例であると考えられる。

謝辞

愛媛大学ミュージアムの吉富博之准教授には原稿をご校閲いただいた。福岡県保健環境研究所の中島淳博士には分布情報についてご教示いただいた。Finnish Museum of Natural History の Olof Biström 博士、長崎県食品衛生協会食品環境検査センターの深川元太郎氏、徳島県立博物館の山田量崇博士には文献をご恵与いただいた。これらの方々に対し、厚く御礼申し上げる。

引用文献

- Biström, O., & Silfverberg, H. 1981. *Hydroglyphus* Motschulsky, a senior synonym of *Guignotus* Houlbert (Coleoptera, Dytiscidae). *Annales Entomologici Fennici*, 47: 124.
- 出嶋利明, 2007. 香川県の水生食肉甲虫類. *香川生物*, (34): 83–96.
- 深川元太郎, 2014. 長崎県におけるアンピンチゲンゴロウ (コウチュウ目ゲンゴロウ科) の記録. *長崎県生物学会誌*, (75): 32–33.
- 深川元太郎, 2015. 長崎県本土の水生甲虫類 (コップゲンゴロウ科・ゲンゴロウ科・ミズスマシ科・ホソガムシ科・ダルマガムシ科・ガムシ科) の記録. *長崎県生物学会誌*,

(76): 24–44.

- Guignot, F., 1959. Dytiscides du Pakistan Occidental. *Bulletin Mensuel de la Société Linnéenne de Lyon*. Lyons, 28: 8–11.
- Hájek, J., & G. Wewalka, 2009. New and little known species of *Hydroglyphus* (Coleoptera: Dytiscidae) from Arabia and adjacent areas. *Acta Entomologica Musei Nationalis Pragae*, 49(1): 93–102.
- 林 成多・藤原淳一, 2007. 屋久島で採集した水生甲虫. *甲虫ニュース*, (159): 7–10.
- 林 成多・門脇久志・松田隆嗣・深谷 治・近見芳恵, 2015. 隠岐諸島における昆虫類分布調査 IV. ホシザキグリーン財団研究報告, (18): 179–196.
- 井上大輔・福岡県立北九州高等学校 魚部・北九州市響灘ピオトープ, 2013. 魚部・地域の自然図鑑シリーズ 4 響灘ピオトープ開園 1 周年記念誌 響灘ピオトープの水辺の生き物. 80 pp. 福岡県立北九州高等学校 魚部.
- 上手雄貴・疋田直之・佐藤正孝, 2003. 日本初記録のアンピンチゲンゴロウ. *甲虫ニュース*, (142): 15–17.
- 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室, 2015. レッドデータブック 2014 — 日本の絶滅のおそれのある野生生物 — 5 昆虫類. 509 pp. 株式会社ぎょうせい.
- 木村正明, 1993. ヒコサンセスジゲンゴロウ屋久島に産す. *月刊むし*, (274): 5.
- 森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版 図説 日本のゲンゴロウ. 231 pp. 文一総合出版.
- 中島 淳, 2005. 福岡県 2 例目となるチャイロピンチゲンゴロウとヒコサンセスジゲンゴロウの採集記録. *甲虫ニュース*, (151): 13–14.
- 中島 拓・湯浅喜久一・梶本泰司・岡崎真也・志水克人・

- 大原賢二, 2005. トダセシジゲンゴロウ *Copelatus nakamurai* の徳島県からの記録. 徳島県立博物館研究報告, (15): 37-41.
- Régimbart, M., 1899. Revision des Dytiscidae de la région Indo-Sino-Malaise. Annales de la Société Entomologique de France, (68): 186-367.
- 坂本 充・秋山美文, 2001. ヒコサンセスジゲンゴロウの広島県における記録. 月刊むし, (367): 49.
- 坂本 充・秋山美文, 2003. ナチセスジゲンゴロウの広島県における記録. 月刊むし, (386): 42.
- 佐野真吾, 2015. 神奈川県初記録のヒコサンセスジゲンゴロウ. 神奈川自然誌資料, (36): 57-58.
- 多比良嘉晃・北野 忠, 2001. 静岡県引佐町でヒコサンセスジゲンゴロウを採集. 月刊むし, (370): 7-8.
- Takizawa, M., 1933. The Dytiscidae of Japan (Part II) (Hydroporinae). Insecta Matsumurana, 7(4): 165-179.
- Vazirani, T. G., 1968. Contribution to the study of aquatic beetles (Coleoptera). 2, A review of the subfamilies Noteridae, Laccophilinae, Dytiscinae and Hydroporinae (in part) from India. Oriental Insects, (2): 221-341.
- 渡部晃平・久松定智, 2016. 愛媛県のゲンゴロウ上科(コウチュウ目). 面河山岳博物館研究報告, (7): 1-17.

(2017年10月11日受領, 2017年11月24日受理)

【短報】新潟県におけるエゾゲンゴロウモドキの追加記録

エゾゲンゴロウモドキ *Dytiscus marginalis czerskii* Zaitzev, 1953 は、環境省のレッドリスト2017において絶滅危惧II類に選定されている大型(体長31~36 mm)のゲンゴロウ科甲虫である(永幡, 2015)。本種は国内では北海道の南部から東部、および長野県、新潟県、栃木県、福島県以北の本州各県から記録されている(永幡, 2015)。分布の南限付近では特に記録が少なく、記録が未公表とされている長野県の場合は不明であるが、栃木県と福島県では産地が局地的で極めて少ないことが知られる。

日本海側の南限にあたる新潟県においては、粕谷(2010)で灯火に飛来した例が公表されているだけだったが、未公表の産地についてもインターネット上に記述が見られ、成虫だけではなく幼虫も得られているようである(2017年9月時点)。



図1. 新潟県産エゾゲンゴロウモドキ(スケールは1 cm)。

筆者らは比較的近年に本種を新潟県内で得ているので、記録を示して採集時の状況を付記する。

2♀, 新潟県中越(標高500-600 m), 10. X. 2015, 高野雄一採集, 岩田泰幸および愛媛大学ミュージアム収蔵予定。

本種を含むゲンゴロウ科の大型種の詳細な産地を公表することは、採集圧を高める危険性があることから、本報告では上記の

ように地名の詳細を伏せた。なお、標本に付したラベルには可能な限り詳細な地名を明記してある。

記録個体のうち1頭(図1)は、採集した時点でほとんど傷や擦れがなく、その年に羽化した新成虫と推測される。もう1頭は体表面に細かい傷や擦れがあり、色彩(特に黄色)がくすみ、触角の欠損も見られたことから、少なくとも1年以上前に羽化したものの生き残りと考えられる。本種は飼育下では成虫で2~3年ほど生存するとされる(例えば、都築ほか, 2000)。



図2. 採集地(2017年6月6日, 岩田撮影)。



図3. 採集地(2015年10月10日, 岩田撮影)。